川柳子

特別
14
1919
740

特
1919
~~126~~
740

頼まれやうに貧乏の底と言い
づふぬれてゐるあば今度は通る身
爪先を擂らし足袋底嚙み
鉛の貝仕毒の札は強く刎ね
軽業のやうに曼荼羅を踏み

夢をう小鳴いの町を選てりき
心中のその親さは敵同士
書置をみんな読もの人他人ら
株割に過きされ住職の成の果
勤務の所のある程に零落し
働いて居る所言深氣が作よ

言葉の角にもろ〳〵の感氣楊
ツンのありそうな鶏雌へ宵
牡鶏の一つ合いもて宵を見せ
手のひらく国々のもう穀つ家
供ゑで呼べハ薬種のあるう
少かな振まるは姫の去ら也

提灯に物鐘まつける淺草寺
門けと著鐘の曲輪の分定雜
門けの鐘双方こうをの突きぬる
彦不彦二つちゝへる塗りまくら
子もおつてやう〳〵親の馬鹿かな
心中ハいや道〳〵やはてゝ見せし

糸柳の向のれん亭主踊つてゐ
産あけく京人供あかくせれうう
粉味噌丶思ひ切る手の美しさ
そこら〳〵行つてわう金めあかし
徳ひあきめ金さく文ひめし
紅葉のあふ沒をひらめ親

首はまさ毒出て湯にはら
旅屋の子をまつ〳〵ぬけて陽うまむ
影のかのかいくさの足つうひ
しごとの食はふ言を菓うも
若屋を望にきまの乳母さくら
胸のうかあたり上る生の時

恥かしい夢は三十をあけ過る
九くから興、悔ゆ五十年
初の子を宵会にまも抱いて出る
今は子の出来ると文も手も下り
掃かせを云くは頭をつきつける

腰帯を締めると腹が生きて来る

義武者を国から馬を国り入る

三味線屋語り出すと思ふる

盃のもめる宵にいくめ

ちゝもゝ姉い方と云る所見わけ

かきつ豆はめつやすきとこへおき

物頼が尺八を吹く顔に出来

子をもつて母不の犬の名をおぼえ

笑つて泣くも袖の涙哉

よゝ待ちに待つまいはまゝ後家の髪

いちはつゝ咲ハ閑かゝ手を合せ

鶴ハすハ海の雪見果かな

とつこいしとて芭蕉二三町
先(百)の世界迄も聞えし
脱つゝんを兎はかゝさわり
血眼になりて兎を尋ぬ
つかまへて懐に兎まゝ抱
てつちらも安堵てとと兎泣き
もめてもと兎を寝かす精進
おりゝゝ兎四方山咲をつき
世界産兎我〻名を人にき、
兎よゝゝちふふいことを云ぬも
三尊の右と左のさ様かりり
腹立ちの芭蕉矢兎ハ帰り

肌寒く行燈の下に酒
母者人行燈の一銚子
公方様行燈飲むべくか
衣紋と足元氣の溜り徳ぢりめん
穴を出て穴に入るまで穴の世話

傾世に誠かなうも運のあき
釣針のやうなふしぶし人をつり
のれくつにめくすを餌にあをつり
髪を結ふときに如月かまり
脇をうつとき黒髪は強えて
飯喰ふ時底位は傾ける

初杉奥女房の声で呼び起す
初のぞかは五百杉奥か五百さま
金杉を見くびって行く初杉奥
初杉奥そちばんの奥いうちで笑ひ
綿入は呑んで酒着る男あり

酒呑の耳を突めく餃の形
祇代もたまらず酒か呑り
八杯の酒にいとゞ(稲田姫)の生つくり
いなひ姫看命の子とゝめ思ひ
素盞男もどやけん(邪剣)ハ切って
捨て給ひ

八雲が つるは 義経の和歌の首
八雲から 次第に 時雨て 和歌の道
万歳 口ずさむ 鼓 はたらかす
角兵衛は 笛ふき はかる人 ふり
二三間 先から 内の 脈をとり
取次に 出る 顔の 美はた
人に 言ふ 異見を 申 いたす
彼のことを いくは 二々 度 つ
定君の あぶら 丸 通る 時
光秀は 生れ 脇 穴 あけ

木綿ふ着るふ怪りの はつ口

めをあけ 惚れは先が広がる

涙ー呼ふ赤ん坊 世つる

未ちくいひる和姉美ー

未ぢ猫も多今のち人れが夢

めぢ起ちくと抱いて寝る

外へ出る森やんと冊ハ内ハ人

母親ハ勿体ふ怪しふ

九のこれのと名をつけて孫ひ牛し
もう嘆も息子枯ゆるを夜ふるう
湯田川まもちゑんやうとまき
まいて来り奴が涙を二が通り
面白者ハ年寄をまもる所ろ

入あき狩の湖しき鏡か淵
ゑの色も青くさむ行く鏡うつち
ゑ島に二つ名のある渭の川
瀬をかくて住めは恋も都島
島の名もかくり息子の気はやり

渭の川我思ふかの向うより
年寄かりくと真清の広いとこ
田楽をなに兎も角ともかくも
田楽しや飲めめか事の如あも
田楽とくつまふ判か南かなり

国衆と呼ばるゝ人の信者ゝ
去り丸どゝ〳〵と流く着き
汐時をまつく去りを堀ハ着け
船方の内儀達の自慢も
沸騒姫よりと女房ハ怪（ひき）

舟をくいと突いてあの内に也
去原の本地いまゝと行乳山
抱き附いてこさる真ちゝ結オ
雲天を天楚ゝ〳〵して乳をかけ
小粒をこゑ人ちくんの大伽藍

人馴れた鳩ハ一寸八分逃げ

提灯に釣鐘まつける浅草寺

朝帰り田圃で狩犯の馬を追ひ

武士もいやけ人すかぬいろは茶屋

尼僧の居る所祖にもてるとこ

水まさる野郎を這入るいろは茶屋

汚泥に染まぬ花を見る義ること

出合茶屋花いけ首か二ツ来る

出合ふことを白鳥のろろんる

此世界一のはちすの茶屋を借り

橋ゝゝ蓮の花のおもしろさ

蓮飯ハ五月立て腹か張る

蓮堀と蔵見会をピヤリ立て

蔵二の池をのぞいて懐かゝん

池の名と杉迄ゐるの美る所

不思の蔵屋と思ハたことをする

湯田きりと物ハ花もあるゝ

其義ゝ来ぬと いとゝ引さゝん

おゝ痛え行くよゝと 陽川

引すつて来ることにゝゝ 浴守

平内は神と佛のまぎれなく
神か儒か佛か平内とうの花
平内は裸を着て文つくる
平内ハ聖し乞食ハ乞食
芭蕉は死ひとみ道の枯草

地獄さくらけの花坊主無妙経
六文ぜ渡あは極楽あるまし
ちりまけて二月過ぬ岩俳
ソクラ馬甘蔗かゝ弱人は口をつぐき
捨て行く子に笑を注ぎし

湯の中でひる屁の玉は肩へ落き
焼の屁は子のほつへへとまりし
さとつとつとブウと放る屁も佛なり
川こしの肩てすあして叱られる
馬の屁のさきに鄙なる一の谷

炬燵かく猫も呆れて顔を出し
就寝で雷と男を驚の屁
あらたまとこの屁を語るふたまき
め礼式もくもころさて屁をころし
恵ひ奏の妹に逢へ於ぶるもすかな

散す花にさく香りとそ
すかしそれはひかりかと思ふ武蔵
空のくさきを分けて出る月
こ花をうえ雲にうつる雲の上
ブッといふ雲をホトケうり
慈氏と花を放つて法ひとうり
仙崖

空の又空梦花を見るやう
いさりの花鏡の列吹き飛し
花をひろう屋根から降る雲太上
文盲な奴さは埋め奴歌望帝
すかし花の消えやすきこを嘆く

みをつくしよりと思ひるこうも

浅草年の市

吠える犬手拭をかふる迄ひまくし

大つを手拭のくくりにぎやうき

馬鹿な形り手拭をかふる引きん

手拭を所々市中きんぢと売

稲木をとろろ手をあげて売引き

此所に来るよ稲木マアよりこしや

木の大小をさしくる市売り

弓削の道鏡矢面と市の客

目は眼鏡崖は入歯ひも解らずと
雲もやあれの値を笑ふ面白
紙の衣着れば浮世か怪しう
振てみても固屋の動く気心
手の甲へ餅と言ひ煙掃
笑ひ色もまぶハ言葉に汗をかき
裁縫婦い髪の毛に鍬をあて
我ひ手恪氣の帯の締り悪き
仆間へ言や恪氣をかくても
うしと見し夜ぞ恐ろい神話

女房の脚い雪月花に立て

女房に誠あて焼き朝ぐくり

うちもつてさとうにあたたし春

朝ぐくり女房元力ときすき

胸くらるのに女房ハ手を拡ま

知見ハ女房こいつと踊きちる

高松えを日光細工ろう

月夜烏帽子女房鏡を

きぬ〻のあとは身にそる一寝くら
ともしびも吹きぬけやうで寒にそる
草鞋はかうあきうのと涙くる
俺に似て俺を似うるを子を育て
書をんびゐんばかりおとろき

中古元のあとの春にそう
口紅が時々殿の身につき
惜しいこと侍女を喜ばしたる
あるあきは去るん産男を清
約束を忘へぬ紺屋あんそう

却りの悪い茶ちんに蓋がつき
叱られたことを平べったく覗まろう
四角な姫姫は野菊のとなり
雪もの時は北を向き
合性は少きくく年の郷なし

注意かあの位なとを街いひ
ちつくくくくしてくくくくと書き
祠る家を姫ごろんで引越し
胸の火かもえてあたまを手焙れし
いはぬ恪 箕と大針と絵ふ

ちゑ急いいつさと女房絶ゑ
動けと女房簾的を出して置き
関とりのニワくかける演劇甚
膝へ来た土産の礼に腦をかけ
夕立を四角に外逃る丸の内
夏芋や馬り面出す破れ垣

御相尺く沿トトもの顔はかり

東京大学
図書